

日米熾烈な戦闘 パラオの人も犠牲痛ましい

晩さん会での天皇陛下お言葉全文

戦後七十年に当たる本年、深い交流の歴史を思い起こし、皇太后と共に、パラオ共和国を訪問してきました。これは、誠に感慨深く、ここにレメンゲサウ大統領閣下のごたびのこのご招待に対し、深く感謝の意を表します。

今夕は、私どものために晩さん会を催していただき、大統領閣下から丁寧な歓迎の言葉を頂き、ありがとうございます。また、この訪問に合わせて、モリ・ミクロネシア連邦大統領ご夫妻、ロヤック・マーシャル諸島共和国大統領ご夫妻が、このパラオ国を訪問になり、今日、明日と続き、私どもと行動を共にしていただくことも誠にうれしく、心より感謝いたします。

なお、このたびの訪問を前にして、ミクロネシア連邦を襲った台風の被害を耳にいたしました。ここに犠牲になられた方々を悼み、ご遺族へのお悔やみをお伝えするとともに、被害を受けた大勢の方々に心よりお見舞い申し上げます。地域の復興の一日も早く、地域の復興の一日も早く、ミクロネシア三国と日本との外交関係が樹立されてから、二十年以上がたちました。今日、日本とこの地域との間では漁業や観光の分野を中心として関係が深まってきたことは、誠に喜ばしいことです。今後それぞれの国との間で一層交流が盛んになることを願ってやみません。

ここに杯を挙げて、パラオ共和国大統領閣下、令夫人、ミクロネシア連邦大統領閣下、令夫人、および、マーシャル諸島共和国大統領閣下、令夫人のご健康とそれぞれの国の国民の幸せを祈ります。

深い交流の歴史を思い起こさせるものであり、私どもに親しみを感じさせます。

しかしながら、先の戦争においては、貴国を含むこの地域において日米の熾烈な戦闘が行われ、多くの人命が失われました。日本軍は貴国民に安全な場所への疎開を勧めるなど、貴国民の安全に配慮したと言われておりますが、空襲や食糧難、疫病による犠牲者が生じたのは痛ましいことでした。

このパラオの地において、私どもは先の戦争で亡くなったすべての人々を悼み、その遺族の歩んできた苦難の道をしるべいたいと思います。

また、私どもは、この機会に、この地域の人々が厳しい戦禍を体験したにもかかわらず、戦後に慰霊碑や墓地の管理、清掃、遺骨の収集などに尽力されたことに対して、心から謝意を表します。

ミクロネシア三国と日本との

パラオ・ベリリュー島の日本兵の一部は終戦を知らずにゲリラ戦を続け、34人が1年8カ月後になって米軍に身を委ねた＝1947年4月、近現代フォトライブラリー提供

遺骨収集など尽力。パラオ国民に謝意

訪問前 天皇陛下お言葉全文

本年は戦後七十年に当たります。先の戦争では、太平洋の各地においても激しい戦闘が行われ、数知れぬ人命が失われました。祖国を守るべく戦地に赴き、帰らぬ身となった人々のことが深くしのばれます。

私もこの節目の年に、戦陣に倒れた幾多のベリリュー島もその一人々の上を思いつつ、パラオ共和国を訪問いたしました。

パラオ共和国は、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国と共に、第二次世界大戦まではドイツの植民地でしたが、戦後、ベルサイユ条約および国際連盟の決定により、わが国の委任統治の下に置かれました。そしてパラオには南洋庁が置かれ、わが国から多くの

本年は戦後七十年に当たります。先ず、昭和十年に、島民の数より多い五万人を超える人々が、この島の島々に住むようになり、終戦の前年には、これらの地域で激しい戦闘が行われ、幾つもの島で日本軍が玉砕しました。このたび訪れるベリリュー島もその一つで、この戦いにおいて日本軍は約一万人、米軍は約千七百人の戦死者を出しています。太平洋に浮かぶ美しい島々で、このような悲しい歴史があったことを、私どもは決して忘れてはならないと思います。

このたびのパラオ共和国訪問が、両国間にこれまで築かれてきた友好協力関係を、さらなる発展に寄与することを念願しています。

私どもは、この機会に、この地域で亡くなった日米の死者を悼み、パラオの国の人々が、厳しい戦禍を体験したにもかかわらず、戦後に、慰霊碑や墓地の清掃、遺骨の収集などに尽力されたことに対し、深く感謝の意を表します。



パラオのレメンゲサウ大統領と会見される天皇陛下＝8日、パラオ国際空港で(代表撮影・共同)

「平和へ強い決意」

サイパン訪問から十年。天皇陛下は八日、訪問先のパラオで、すべての戦争犠牲者への追悼の気持ちを表された。「お言葉」からにじみ出るのは平和への強い意志だ。言葉に込められた思いを識者に聞いた。

(注)加藤、小松田健一、十門哲雄



パラオ・ベリリュー島に上陸した米軍＝1944年、近現代フォトライブラリー提供

天皇陛下「お言葉」で識者

昭和史に詳しいノンフィクション作家の保阪正康氏は、晩さん会のあいさつで「先の戦争で亡くなったすべての人々を悼み、その遺族の歩んできた苦難の道をしるべいたいと思います」という部分に着目。「パラオでは日米間の戦闘だったが、他の国も含めた真にインターナショナルな犠牲者を意識している」と指摘した。

また出発時に「悲しい歴

史があったことを、私どもは決して忘れてはならないと思います」と述べたことについても、「強いトーン」ともすれば戦後七十年で、本心からの決意だ。ある意味で感動する」と話した。

公益財団法人「モロロジ一研究所」の所長教授(日本法政史)は、晩さん会のあいさつについて「旧日本軍がパラオの住民に疎開を勧めるなど、安全に配慮していた事実を紹介した上で『空襲や食糧難、疫病による犠牲者が生じたのは痛ましいことでした』と、パラオ側の被害に率直に触れら

れた。日本とパラオの間で、委任統治時代の良かったこと、戦時中の被害、戦後の対応への感謝と、時代ごとにパラオと分かれた。日本とパラオの間で、日本とパラオの間で、委任統治時代の良かったこと、戦時中の被害、戦後の対応への感謝と、時代ごとにパラオと分

「今回の訪問自体が、戦争のことを忘れてはならない」と、自身の体で示されたことになり、どんな教科書よりも記憶の伝承になる。私の父もソロモン諸島で戦死したが、戦没者遺族にとっては、今なおお気持ちを寄せていただいていという点がありたく感じる」と話した。

フリー記者らでつくる「太平洋戦争研究会」代表

で、パラオの取材が続いてきた平塚伸輔氏は、晩さん会のあいさつで、遺骨収集へのパラオ側の協力などに謝意を表したことに「私が遺族の遺骨収集に同行した約四十年前、ベリリュー島の人たちがジャンクルの道を通り、協力してくれた。慰霊碑や墓地もきれいにしてくれて、敬意を感じた。陛下は現地の方たちの気持ちにも配慮され、本当によく勉強されている」と分析。

「ライパン島への訪問から十年。お言葉からは、平和への強いお気持ちが全く変わっていないと感じた。戦争体験者が減り、風化が進む中、国民や政治家こそ、しっかりと歴史を勉強する必要がある」と話し

日米以外の犠牲者も意識

た。